



三井高房筆 蛭子・大黒の図

口 絵 三井高房筆 蛭子・大黒の図 (絹本墨画淡彩 本紙八三・六cm×三四・一cm、北三井家旧蔵)

商売繁昌を祝う蛭子講は商家にとつて大事な行事である。越後屋本店(呉服店)では、正月一日と一〇月一日を蛭子講の日と定め、京・江戸・大坂の各呉服店で一斉に行事を取り行なつた。京本店では前日一八日の夕方に、新町三井家が蔵する大黒天と、中立売家(六角、現伊皿子家)が蔵する蛭子神の二像を店に迎え、床の間の一つに鎮座させた。また、会所の床の間には三井高房の描いた蛭子・大黒の図二幅一対が、絹加賀方の床の間には福祿寿・蛭子・大黒図三幅一対が、二階目録庭の床の間には如川筆の福祿寿が飾られた(時期により異なることもあつた。なお、これら店内三カ所にある床の間の位置については、本号「越後屋京本店の年中行事」解説中の「越後屋京本店内略図」を参照されたい)。

三井高房(一六八四〜一七六〇)は、総領家の北家二代高平(宗竺)の長男で、三井の創業者高利の孫にあたる。享保元年(一七一六)八月に、京本店の店名前であつた全三井を代表する名前でもある八郎右衛門となり、享保十九年(一七三四)三月に退隠して宗清(後崇清法名泰門近事)と号して後も諸制度を次々に確立した。元文三年(一七三八)には親分となり、三井全体を取り仕切つた。

高房の描いた蛭子・大黒の図は、京・江戸・大坂三か所の本店それぞれに送られ、元文元年(一七三六)一〇月の蛭子講から掛けられるようになった。絵の巧拙にかかわらず、三井の基盤を固めた一族の長に対する尊崇の意味合いを含めて、商売繁盛を祝う大事な日に高房の絵が三都の店々に飾られたものと思われる。

高房の筆になる蛭子・大黒図には何種類かの図柄あり、明治初年の裂店が保管していた図には、釣り糸を垂れた蛭子神の姿がある。口絵の写真は、延享元年(一七四四)二月に描かれたもので、高房が還暦を迎えた記念の作品であろう。おそらく北三井家の祭礼のさいに掛けられたと思われる。

(樋口知子)